Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-27

熊谷空襲 ： 母の日記から

寺島, 俊雄

(Citation)
のじぎく通信,61:46-51

(Issue Date)
2015

(Resource Type)
article

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/90003025

熊谷空襲……母の日記から……

神戸大学大学院医学研究科　神経発生学分野

寺島俊雄

私が生まれ育った埼玉県熊谷市は荒川の扇状地に位置する平凡な一都市にすぎない。ただ酷く暑いところで、平成十九年八月十六日に当時の日本観測史上の最高気温四十・九℃を叩き出し、その後、自虐的キャッチフレーズ「あついぞ！　熊谷」で全国的に有名となった。この何の変哲もない小都市が昭和二十年八月十五日未明、マリアナ諸島テニアン島とグアム島の基地を飛び立った八十九機のB29により徹底的な空爆を受ける。八月十四日から十五日の未明にかけて空襲を受けるのは熊谷ばかりではない。群馬県伊勢崎市、神奈川県小田原市、山口県岩国市、同光市、大阪府、秋田市土崎なども空襲を受ける。中でも気の毒なのは小田原市で、伊勢崎、熊谷で落とし損ねた爆弾を帰路のついでにB29が落としたという

からひどい話である。八月十五日未明に空襲を受けた上記の都市の市民は硝煙のくすぶる中で終戦の詔勅を聞いたことになる。被災者や遺族にしてみたらば、せめてあと一日終戦が早ければと思ったことだろう。

昭和二十年二月以来、米軍はB29爆撃機を使って地方都市に大量の宣伝ビラを空から散布して国民の間に厭戦ムードを高める心理作戦を展開していた。宣伝ビラの内容よりその紙質の良さが日本国民を驚かせたという笑えない話も残っている。熊谷市民に向けてのビラは「花の熊谷 忘れはせぬが お茶の静岡 先にやる」と空襲の事前予告を匂わせる文であった。「花の熊谷」とあるように熊谷市内を流れる荒川堰堤の桜並木は当時も今も美しい。六月十九日深夜から二十日未明にかけて静岡市は大空襲を受けたことより、次の空襲は熊谷という心理的な圧迫感を熊谷市民は感じていただろう。一方、終戦前日の八月十四日には軍関係者からの情報として「明日の十五日は天皇陛下による重大放送がある」という噂が熊谷市民の間に広がっており、空襲を受けることなく戦争が終わるかも知れないという安堵感が漂っていた。終戦前日に日本がポツダム宣言を受諾するといういう噂が広がったのは熊谷ばかりではない。神戸市にも同様のうわさがあったことは妹尾河童著「少年H」(講談社)に詳しい。

当時、私の母は熊谷市衛生組合立 熊谷産院で主任産婆(助産婦)として働いていた。戦後生まれの私はときおり戦争に関する話を母から聞くことがあったが、その母も平成十三年に死んだ(享年九〇歳)(図2)。母の遺品の中に八月十四日深夜の熊谷空襲のことを記録した日記があった。米軍の公式記録では、八月十五日の午前零時二十三分に最初の爆撃があり、それから一時三十九分までの七十六分の間、空爆が続いたことになっているが、日本側の記録では母の日記と同様に、最初の爆撃は八月十四日午後十一時半ごろである。この日米間の食い違いが生じる理由は不明だが、B29爆撃機の本隊が到達する前に熊谷上空に達した先導隊が十四日深夜にまず爆撃を開始したのかも知れない。母親の日記にも照明弾の落下後、しばらくの間、爆撃はなかったようなのである。いずれにしても八月十五日の未明に熊谷は空襲を受けて灰燼に帰すことになる。



図1　熊谷空襲



図2　寺島トヨ

母の日記は、「戦争日記八月十四日のこと」と題して、昭和二十年八月十四日の深夜、灯火管制下で蚊取り線香の灯りを頼りに分娩の介助をしたことを記録したものである。そして空襲が始まると八人の入院産婦とそれぞれの生まれたばかりの赤ちゃんを安全な郊外に誘導した記録でもある。母は熊谷市の北の肥塚（こいづか）に向かって逃げたが、もし多くの熊谷市民と同様に市街地を抜けて南の荒川河川敷の方向に逃げたならば、無事ではなかったろう。この亡母の戦争日記は戦争末期の医療事情を知る上で貴重な記録ではないかと思い「神戸大学のじぎく通信」紙上を借りて紹介するものである。

戦争日記（昭和二十年八月十四日のこと）

埼玉県熊谷市衛生組合立熊谷産院

主任産婆　寺島トヨ（三十四歳）

体中が汗でじだじたとなる蒸し暑い夜、隣組より夜は明かりをつけてはならないというお話があった。その時、入院産婦あり。電気もつけることもできず、分娩室は黒一色の暗幕で覆われている。産婦の陣痛も強く、思いついたのが「蚊取り線香」だった。これに火を点けて分娩進行。やがて真夜中、一つの蚊取り線香の光を頼りに二人の助手の手を借りて今生まれる赤ちゃんの頭部が発露する。もう一息、さあ、しっかり。産婦の呼吸がハアハアと波打つ。母体を励まし、蚊取り線香の燃えた灰を取りながら局部に近づけると、やがて元気な産声が上がった。

赤ちゃんの声に励まされ、産婦も私も嬉し涙にむせんだ。正常分娩の安産だったのがせめてもの救いであった。手さぐりで赤ちゃんの臍帯を消毒し、結紮して切断する。手早く助手が赤ちゃんの体を消毒綿で拭き、産湯に入れてあげることもできないままに産着を着せた。やがて胎盤の処置も終わる。真っ暗の中でこんなにも蚊取り線香の明るかったことは、生涯忘れることができません。また有難いと思ったこともありません。

母体の汗を拭き、「良かった、良かった。安心してください。赤ちゃんも元気ですよ。」と母体に赤ちゃんを近付けると、母親は優しく撫で回してやっと安心したようでした。

やがて産婦をもんぺ姿にし、防空頭巾を枕もとにおき、一杯の水を産婦に飲ませ、蚊取り線香の火を消しました。これで私も安堵し、急に気の疲れと暑さのために廊下に出て、空を何気なく眺めた。やれやれ、良かった・・・・と思った。

その時だった。八木橋デパート辺りに、突如照明弾が落とされた。空は明るく昼間のようだった。主人を起こした。しかし、警報はまだ出ない。怪しんでいると、空

襲警報がけたたましく鳴った。さてはと思い、日ごろの訓練を生かして入院産婦を起こし、二人の助手を伴い、私は今分娩したばかりの産婦を背負い、胸には三角巾袋の中に赤ちゃんを抱き、急ぎ防空壕に入った。入院者の数は八名であったことを記憶している。

日ごろの訓練とは

（一）分娩が終わると、すぐ産婦にもんぺをはかせ、防空頭巾を何時でも付けることができるようにする。風呂敷で三角巾を作り、後ろで結んで首から下げ、その中に赤ちゃんをいれて胸で抱く。

（二）防火用水、バケツ、防空壕への入り方、非常持ち出しもの等々

避難はものすごい早業だった。空は敵機より次々と落とされた照明弾で、真昼を欺く青白い光。その中を渦巻く紅蓮の焔が円を描き、B29米軍機がウオーンウオーンと独特の飛行機音で旋回する。爆撃の惨禍ものすごく、生きた心時はさらさらなし。いよいよ防空壕より出て避難しなければと身に危険を感じた。次々と爆弾が落ちた。恐ろしい音だ。防空壕の上の土、砂がザザザァーと音を立てて落ちた。私は意を決した。さあ安全の道を選び、逃げようと。

一人一人の産婦に三角巾袋を首から下げ、赤ちゃんをこの中に入れて抱き、後ろで結んだ。焼夷弾の雨あられ。炸裂。火の海。逃げ惑う市民。絶対絶命だ。一人一人防空壕より這い出し連れ出した。産後三日四日の間もない産婦が防空頭巾をかぶり、火の移るのを防ぐためにバケツで水をからだに二杯三杯ザァーザァーかけて、濡れねずみになって全員出た。その目の先に小型爆弾が恐ろしい音で落ちた。砂が五メートルも上がった。一声、「伏せー」。一同伏せる。目から火花が散った。「伏せー」「立てー」「伏せー」「立てー」と号令し、蹲き蹲き行く。胸の赤ちゃんは不思議と泣かない。

ふと頭を上げると、「火事だー」との声。市役所と公会堂から三メートルくらいの火が噴き出ていた。その時は雨かと思ったが、油やガソリンが降っていたことは後で気が付く。庭の桐の葉が飛行機の爆音とともにピュン・ピュンと落ちた。機銃掃射だ。少しすると静かになった。二分か三分だったと思う。もうだめだと思って、肥塚の方に逃げた。焼夷弾が前後に横にと無数に落ちた。ゴーゴーと凄まじい音だ。後のお話では米軍機B29百数十機とか。

ただただ無事に逃げることだけ。道端には荷物がゴロゴロしていた。手荷物は捨てて、逃げるのが精一杯。命懸けの大仕事。蹲き蹲き進む。皆、声も出ない。公会堂の前を通ると火焔で頭が焼けそうに暑い。市役所は窓を突き破り、五メートルの火焔が上がっている。急げ、急

げ。夢中で歩いた。まだ出産後数日の方々が痛ましいが、考える暇なし。私も力があったから背負った産婦と胸の赤ちゃんと、とにかく全員無事であればとだけ念じ、肥塚方面へ逃げた。

ふとかすかな声で、「家族と離れ離れです」というおばあさんがいた。おばあさんは熊谷寺の方でした。「私の後をついてきて下さい」と声をかけた。皆もくもくと続いてきた。

市街地からだいぶ離れた。ここまで来れば安全だろうと、肥塚の畑の畔に皆を寝かせた。熊谷の空を振り返ると、まだまだB29が円を描き、焼夷弾が青く空中で炸裂する。爆弾はズドンズドンと落ちる。火事は大きく広がっていく。幸いなことに逃げた場所が良かった。ひとまず安全だが、一人も声も出ない。放心状態である。畑の中に一同横になり、全員の無事を確かめあった。まだ気が抜けないが。火の海、火の中にくっきりと家が残っていると思った次の瞬間には、辺りの火に包まれて、空高く紅蓮の炎の中にサッと消えるさまは、何とも言い難い感じでありました。

生気を少し取り戻した頃、B29も飛来が数少なくなり、やがて去っていった。疲れを感じる暇なし。夜が白々と明けるのを待って、赤ちゃんに母乳を飲ませ、ひとまず畑の中から出た。今の今まで逃げ惑った道を産院近くまで来た。辺り一面が焼野原だ。市役所も公会堂もない。しかし産院は焼けずにあった。庭の柿の木に焼夷弾が不発でひっかかってあり、その庭の中に爆弾の落ちた深い穴もあった。ガソリンや油がまかれ、雨のごとくに降り注いだために、木の葉も黒くなっている。

一同「あったよー、あったよー」と真っ黒の顔。土にまみれた体ですすり泣いた。その顔、全員無事な姿を見て、初めて我に返りました。その時、私も妊娠三か月の体であったが、一度も自分のことを考えている暇なしの連続であった。

数時間の後に、妊婦の身寄りの方々が訪ねてまいり、全員ひとまず退院しました。一室だけを救急の分娩室に残し、後は全部、市内の怪我人のために役立てた。空襲で傷ついた人々が連れ込まれる。ああ、何ということか。それは阿鼻叫喚というのだろうか。うめき声、泣きわめき、すすり泣く人。着物は裂け、真っ黒だ。耳のとれた人、胸が焼かれて乳房が片方とれた女の人。火傷だ。それも重症ばかり。臭気が一面に漂った。

患者は全部で百二十名。一部屋に十人ずつ入った。一部屋六畳である。日赤から看護婦さん二十八名が派遣されてきて、患者の手当てに当たってくださった。日々交替で医師、看護婦さんが勤務しました。庭に「よしず」を張り巡らし、風呂桶を持ち出し、皆ここで看護婦さん

も汗を流しました。

私も看護婦さんのお手伝いを致しました。「埼玉県熊谷市衛生組合立熊谷産院」の看板は外し、傷ついた方々の看病をしました。一日一人くらい死亡。薬も少なく、勘でチンク油を製造して傷口の手当て。患者さんの傷口からウジがはい出す人もいました・・・・。

今思うと、よく生きていたものと不思議でなりません。そして戦争も終わりました。（当時の日記より）

表1　昭和20年8月14・15日　日本本土最後の空襲

	都市	空襲時刻	爆撃の目的	概要
1	岩国市	14日昼ごろから20分	岩国駅麻里布操車場	B29爆撃機100余機。死者517人、行方不明30人、負傷者859人、全壊家屋543、半壊家屋343、罹災者5911人
2	光市	14日午後0時20分～午後1時	光海軍工廠	B29爆撃機157機。死者738人（内訳：軍人51人、軍属554人、動員学徒133人）
3	大阪府	14日午後1時ごろ	大阪城内の大阪陸軍造兵廠	B29爆撃機約150機。死者数不明（身元判明者210名以上、身元不明者500－600名以上）。（※）
4	熊谷市	14日午後11時半～15日午前0時半	熊谷市街地	B-29爆撃機89機。死者234名、被災人口15,390名、焼失家屋3,630戸。
5	秋田市	14日午後10時27分～15日午前2時39分	土崎港周辺（日石秋田製油所）	死者は250人以上、負傷者は200人以上。建物の全焼104、半焼6、全壊12。
6	小田原市	15日午前0時～3時	小田原市街地	B29爆撃機5・6機。死者48名、負傷者40名、全焼家屋474戸、全壊家屋10戸、罹災者1,666名。
7	伊勢崎市および周辺	14日深夜～15日未明	伊勢崎市街地	B29爆撃機84機。死者29人、重軽傷者150余人、1943戸の家屋が焼失（伊勢崎市の被害のみ）。市街地の約40%が焼失。罹災者8,511人（人口罹災率21.3%）。

（※）この空襲は第8回大阪大空襲（京町駅空襲）といい、それまで破壊を免れていた大阪城内の大阪陸軍造兵廠（大阪陸軍砲兵廠）がピンポイントで狙われた。造兵廠の北側の京橋駅に一発の一トン爆弾が落ちる。爆弾は高架上の城東線（現在の大阪環状線）を貫通して階下の片町線（今の学研都市線）ホームで爆発し、退避中の乗客7・800名がここで命を落とす。